

Title	近世鉄山業の研究動向と展望(一) : 武井博明『近世製鉄史論』を中心として
Sub Title	The iron industry (tatara) in Tokugawa Japan (1)
Author	大貫, 朝義
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1973
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.66, No.4 (1973. 4) ,p.225(41)- 241(57)
JaLC DOI	10.14991/001.19730401-0041
Abstract	
Notes	学界展望
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19730401-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学 界 展 望

近世鉄山業の研究動向と展望(一)*

——武井博明『近世製鉄史論』を中心として——

大 貫 朝 義

「……抑も物理器械の学漸く進歩して之を人事の實際に施すこと日に益盛なるに従ひ、百工皆鉄を要するは必然の勢にして、鉄以て鉄器を造り、鉄器又鉄器を生じ、凡そ人間需要の家なり船なり什器なり衣服なり、材木に諸金に毛に絲に、其由て来る所の本を尋れば悉皆鉄器の製作を経ざるものなし。試に今西洋舶来の貿易品を見るに、鉄器を用ひずして其形を成したるものは細大共に一品もなかる可し。鉄は人間需要品の元祖にして文明開化の実形と云て可なり。従来我国の如きは鉄を用ること甚だ多からず。即ち器械の用法未だ進歩せず、物産の道未だ大に開けざるの證にして遺憾と云ふ可し。……」(福沢諭吉「民間経済録二編」, 明治

13年)**

内 容

I. 序

II. 民営鉄山業

一、生産構造

(1)鉄(山)師=鉄山経営者の系譜(出自)

(2)資本形成・経営の諸類型

(3)労働者の性格——基幹部門=「山内」専属労働者——

(4)稼行地帯村落との関係——副次部門、分業・市場構造——(以上、本号)

二、流通=市場構造

III. 鉄穴の所有と経営

IV. 藩営鉄山業と藩の流通統制

V. 加工業の展開

VI. 結び——若干の展望——***

I.

近世日本の鉄山業が砂鉄精錬業であり、基幹部門である(1)鑛(鉄・銅押)、(2)長割(割鉄)・細割(千割)・釘地(小割)の各鍛冶屋、及び副次部門である(3)鉄穴流し(砂鉄採取)、(4)木炭製造(鑛用大炭・鍛冶用小炭)、(5)駄賃稼(原料・製品の運搬)という五つの工程から構成されたこと、基幹部門の作業の殆どが「山内」の専属労働者に

(注)* 鉄山業の研究動向は、向井義郎「たたら研究会について」(歴史評論 119号, 1960)、渡辺則文「地方史研究の現状——中国(1)広島県——」(日本歴史 209号, 1965)などにも簡単に紹介されており、また「たたら研究」の掲載論文の内容を辿ることによっても知ることができるが、従来の研究史の整理稿としては、片田朋子「戦後における芸備地方鉄山業の研究をめぐって」(たたら研究 9号, 1962)、芸備地方史研究会「戦後における広島県地方史研究の成果と課題」(I)(芸備地方史研究 48・49号, 1963)の武井・片田両氏による鉄山業関係執筆分担部分、武井博明「近世鉄山業史研究の問題意識」(たたら研究 14号, 1968)などがある。片田、武井両氏の論文にはそれぞれ文献目録が付されており、本稿作成にあたっても活用させていただいた。武井氏の文献目録は極めて包括的であるが、ほかに芸備地方史研究会「戦後における広島県地方史研究の成果と課題」(II)——広島県地方史研究文献総目録——(芸備地方史研究 51・52号, 1964)、日本科学史学会(飯田賢一・黒岩俊郎)編「採鉄冶金技術」(「日本科学技術史大系」20, 第一法規出版, 1965)巻末所収の文献目録(579~590頁)、立川昭二「鉄」(学生社, 1966)巻末所収の文献目録(251~261頁)、飯田賢一・大橋周治・黒岩俊郎編「鉄鋼」(「現代日本産業発達史」IV, 現代日本産業発達史研究会, 1969)巻末所収の文献目録(1~10頁)などがある。なお、向井義郎「たたら研究会について」、同「近世鉄山業の問題」(地方史研究 64号, 1964)において問題点の整理がなされており、また同氏の「中国山脈の鉄」(地方史研究協議会編「日本産業史大系」7, 中国四国地方篇, 東京大学出版会, 1960)は最も優れた概説書とされている。

** 日本鉄鋼史編纂会(小島精一)編「日本鉄鋼史(明治篇)」(千倉書房, 1945)11頁。「福沢諭吉全集」第四巻(岩波書店, 1959)375~376頁。

*** 以上(二)は三田学会雑誌66巻9号に掲載予定。

(1) 技術、作業工程については、結城次郎・磯貝勇「中国地方における砂鉄製錬法の史的的研究」(1931)38~50頁、俵国一「古来の砂鉄製錬法(たたら吹製鉄法)」(丸善, 1933)、杉本寿「資本主義の発展におけるタタラ企業の役割」(福井大学学芸学部紀要, 第III部<社会科学>7号, 1957)60~76頁、向井義郎「中国山脈の鉄」167~178頁、同「江戸時代鉄押法による鑛鍛冶作業の内容と技法について」(1)(2)——香川家「鑛鍛冶屋万覚書帖」を中心に——(たたら研究 6, 7号, 1961)石塚孝俊「村下の話」(山陰民俗学会「山陰民俗」24号, 1965, 及び出雲民俗の会「出雲民俗」17号, 1952, に分載。後、石塚孝俊「鑛と鍛冶」所収, 岩崎美術社, 1972——以下、「鑛と鍛冶」所収の論文の引用は全てその頁数による)177~207頁、同「鑛の技術」(鳥根県教育委員会「岩谷鑛」所収, 1968, 後、石塚孝俊「鑛と鍛冶」所収)101~147頁などに詳しい。なお、俵氏の著書には同氏の「明治時代における古来の砂鉄製錬法」のほか、下原重伸の著名な「鉄山秘書」(天明四年)が収録されている。

近世鉄山業の研究動向と展望(一)

よって行われたのに対し、副次部門は多く稼行地帯農民の浮儲(農間余業)として行われたこと、そして良質・豊富な砂鉄と木炭山の所在というふたつの主要な立地条件に恵まれた但馬、播磨、美作、備中、備後、安芸、石見、出雲、伯耆、因幡等中国地方の中国山脈沿いの地域、及び九州の一部(肥前、日向、薩摩等)、東北地方の一部(陸中、陸前等)を中心とした分布を示した⁽²⁾が、そのなかで、中国地方がとりわけ高い比重を占めたこと、等は既に周知の事実である。

この近世鉄山業に関する「社会経済史的」な研究は諸論点につき既にひと通りの結論が出揃った観があり、また問題関心の推移もあって、最近の研究は時期的には古代及び明治期以降に、内容的にはC⁽⁴⁾年代の測定・評価の問題や、鑛製鉄業から近代製鉄業への移行乃至日本資本主義発達史との関連を扱うものに、それぞ

れ重点を移してきているが、近世鉄山業の研究史に一時期を画するものと言ってよい武井博明氏の諸労作が、『近世製鉄史論』として昨年刊行された⁽⁴⁾。曾て武井氏は、近世鉄山業に関する「社会経済史的」な研究の始期を大正年間に求め、それ以降の研究史を五つの時期区分を設けて概観し、その中で戦後の第四期(昭和後期前半)以降、特に「たたら研究会」が発足し(1957年)、「たたら研究」が発刊された(1858年)第五期(昭和後期後半)以降、地域的にもテーマのうえでも数多くの研究の積み重ねと深化がみられたにも拘らず、研究上の「問題意識」、「方法論的問題提起」が寧ろ稀薄化する傾向にあることを指摘されたが、この『近世製鉄史論』の刊行により、近世鉄山業の研究は有力な座標軸を与えられることになった。

ところで、近世鉄山業に対しては従来ふたつの側面

注(2) 立地条件については、俵国一、前掲書(『鉄山秘書』)20~21, 34頁、(『明治時代における古来の砂鉄製錬法』)24~25頁、庄司久孝「たたら(鑛)の経営形態より見たる出雲・石見の地域性」(島根大学論集〈人文科学〉1号, 1951)2頁、同「たたら歴史地理学的研究——出雲・石見の場合——」(人文地理学会編『歴史地理学の諸問題』所収、柳原書店、1952)119頁、岩永実「鑛製鉄の生産構造」(多田文男編『現代地理講座』第7巻所収、河出書房、1956)271, 279~280頁、向井義郎「中国山脈の鉄」168, 172頁などを参照。分布については、俵国一、前掲書(『鉄山秘書』)18~19頁、岩永実「鑛製鉄の生産構造」268~271頁、向井義郎「中国山脈の鉄」166頁、武井博明「近世後期における鉄の流通について」(福尾猛市郎編『内海産業と水運の史的的研究』所収、吉川弘文館、1966、後、武井博明「近世製鉄史論」所収、三一書房、1972——以下、「近世製鉄史論」所収の論文の引用は全てその頁数による)237~238頁などに一般的な形で述べられているが、更に寛政3年の鑛・鍛冶屋の分布について、武井博明「中国地方砂鉄精錬場分布図」(たたら研究5号, 1960、後、「近世製鉄史論」所収)及び同「近世八幡高原における鉄山経営——鉄山労働者の家族構成について——」(広島県教育委員会編『三段峽と八幡高原』所収、1959、後、「近世製鉄史論」所収)174~177, 197~198頁、砂鉄産地、産額について、大橋博「明治前期における鉄生産の分布状態と諸問題」(たたら研究7号, 1961)鉄穴・鑛・鍛冶屋の分布と産額について、武井博明「幕末・明治初年中国地方における鉄産地および産額」(たたら研究8号, 1962)、幕末・明治初年の中国地方砂鉄産地、産額について、武井博明「近世後期における鉄穴経営と村落構造」(史学研究101号, 1967、後、「近世製鉄史論」所収)12~18頁、また局地的な分布を扱ったものとしては、鑛について、庄司久孝「たたら(鑛)の経営形態より見たる出雲・石見の地域性」6~7頁、近世鉄山業の分布について、宇野正彦「兵庫県栗原郡における近世鉄山業について」(たたら研究会研究紀要創刊号, 1958)16~24頁、近世後期の鉄穴・鑛・鍛冶屋について、定本正芳「美作西北部の鉄山業と地域社会の変貌」(2)(たたら研究4号, 1960)10~12頁、慶応元年の砂鉄産地について、鶴殿治雄・河野寿「藩政末期備後恵蘇郡の鉄穴」(たたら研究9号, 1962)23~24頁、近世の鑛・鍛冶屋について、宗森英之「岡山県の製鉄地分布図」(たたら研究10号, 1963)、主として近世の鉄穴・鑛について、森脇太一「石見江津地方における小鉄事業」(たたら研究13号, 1966)31~35頁などを挙げることができる。

(3) 明治前期までは中国地方が鉄の主産地であり、全国産鉄量に占める比率は明治初期で9割、中期で6割とされている。たとえば、日本鉄鋼史編纂会編『日本鉄鋼史(明治篇)』17~18, 75~79頁、庄司久孝「たたら(鑛)の経営形態より見たる出雲・石見の地域性」1頁、同「たたら歴史地理学的研究」119頁、三枝博音・飯田賢一編『日本近代製鉄技術発達史——八幡製鉄所の確立過程——』(東洋経済新報社, 1957)109, 112頁、向井義郎「中国山脈の鉄」164~165頁、飯田賢一「近代製鉄技術史研究の立場からみた『たたら製鉄』について」(たたら研究14号, 1968)26, 31頁、武井博明「近世八幡高原における鉄山経営」173頁、向井義郎「官営広島鉄山とその経営」(たたら研究会編『日本製鉄史論』所収、1970)300頁などを参照。

(4) 前掲の武井博明「近世製鉄史論」。

(5) 武井博明「近世鉄山業史研究の問題意識」19頁。なお、鑛製鉄業の研究は、1)技術史、2)社会経済史、3)歴史地理学、4)民俗学等の観点から進められてきている。

近世鉄山業の研究動向と展望(一)

から歴史的な位置づけが与えられてきた。即ち、まず第一に「たたら製鉄の技術的地盤とそれに基づく鉄の普及が全国的に達成されて」おり、「鉄を人間生活や産業経済上の最も基礎的な物質」だとする「産業技術思想」が生み出されていたことは、近代製鉄技術の受容の上で直接・間接の基盤となったが、しかし第二に「わが国の近代製鉄技術は、古来のたたら製鉄法の否定のうえに、ヨーロッパ技術の移植のもとに成立した」のであり、明治期の鉄鋼生産の比重は中国地方のたたら製鉄→釜石鉄山田中製鉄所⁽⁸⁾(1894年)→官営八幡製鉄所⁽⁹⁾(1901年)という推移を示したということである。そしてその場合、たたら製鉄業が洋式製鉄技術の導入に努めながらも結局衰退していかざるを得なかった原因としては、(1)自然条件(資源の潤渇)、(2)熱効率の低さ、

生産規模が小さく量産技術に適さないこと、吹滓中に40~50%の鉄素を混失すること、等々製法の不経済性及び労働生産性の低さに由来するコスト高、洋鉄との価格差、(3)関税自主権喪失下における安価な外国鉄・鋼の輸入による圧迫、(4)洋式製鉄技術の導入それ自体に自然条件の制約・技術的限度があり、技術改良も部分的・漸次的なものに留まったこと、しかしなお、そこから生ずる基幹部門における改良と副次部門での停滞という不均衡、(5)鉄道、建設、兵器をはじめとする大量需要と結びつき得ない鑪・鍛冶屋の生産・処理能力の低さ、(6)明治政府の「工業化」=「殖産興業」・「富国強兵」路線からはずされ、明治初年の全国的な凶作や旧幕藩時の特権解消と新しい諸負担の賦課、洋鉄輸入による圧迫等々の中で、その変化に対応できず旧来の生

注(6) 飯田賢一「洋式高炉の移植と釜石鉄山」(地方史研究協議会編「日本産業史大系」3、東北地方篇、1960)339、343頁、同「近代製鉄技術史研究の立場からみた『たたら製鉄』について」28~29頁、同「わが国における近代製鉄業の夜明け」(飯田・大橋・黒岩編「鉄鋼」第一部、序章、第二節)14~15頁。

(7) 飯田賢一「近代製鉄技術史研究の立場からみた『たたら製鉄』について」26頁。ただし、この洋式技術の導入(移植)、即ち反射炉・高炉の建設過程における南部藩士大島高任をはじめとする日本の製鉄技術者=蘭学者の活動は、蘭書に依拠しつつも「もっぱら自らの力と日本の資材とのみ」によりそれを達成した点で、主体的・創造的なものとして積極的な評価をうけている。たとえば、日本学士院日本科学史刊行会(三枝博音)「明治前日本鉄業技術発達史」(丸善、1958)305~334頁、飯田賢一「洋式高炉の移植と釜石鉄山」335~338、344~355頁、藤野保・山本弘文「西南雄藩の洋式工業」(地方史研究協議会編「日本産業史大系」8、九州地方篇、1960)328~332頁などを参照。

(8) 飯田賢一「近代製鉄技術史研究の立場からみた『たたら製鉄』について」27、30~32頁、同「洋式製鉄への移行」(前掲「鉄鋼」第一部、第三章)55頁。

(9) 大橋博「明治前期における鉄生産の分布状態と諸問題」7頁。

(10) 日本鉄鋼史編纂会編「日本鉄鋼史(明治篇)」66~71頁、森嘉兵衛「南部の鉄工業」(地方史研究協議会編「日本産業史大系」3、東北地方篇、1960)262頁、飯田賢一「近代製鉄技術史研究の立場からみた『たたら製鉄』について」32~36頁、同「洋式製鉄への移行」58~60頁、野原建一「中国地方の諸鉄山」(前掲「鉄鋼」第一部、第二章)43~47頁。なお、明治16年以降の官営広島鉄山において、小花冬吉・黒田正暉により吹滓を利用した製鉄が行われたことは、上掲、日本鉄鋼史編纂会編「日本鉄鋼史(明治篇)」73~74頁、飯田賢一「近代製鉄技術史研究の立場からみた『たたら製鉄』について」32頁、同「洋式製鉄への移行」59~60頁、などのほか、三枝博音・飯田賢一編「日本近代製鉄技術発達史」115~116頁にも述べられているが、向井義郎「官営広島鉄山とその経営」308~316、327~328頁においてその経過が詳細に明らかにされた。それによれば、明治26年に煉瓦製・半永久的な鉄滓鉄吹用の本格的な高炉が完成し、全部で四ヶ所に設置されたが、当時既に洋式大製鉄所中心の時代に入っており、且鉄滓鉄による製鉄は砂鉄鉄使用の錬鉄より品質が劣ったのみならず、ヨリ多くの建設費、原料(鉄滓)運賃等を要し、鉄滓利用にも限度があったため、新たな発展をみることなく終わったとされている。

(11) 大橋博「明治前期における鉄生産の分布状態と諸問題」8頁。なお、日本鉄鋼史編纂会編「日本鉄鋼史(明治篇)」18~21、96~97頁、三枝博音・飯田賢一「日本近代製鉄技術発達史」111~112頁。

(12) 上記の鉄滓吹製鉄法のほか、主要な技術改良として挙げられるものは、1)送風装置としてのトロンプ、2)汽爐、などであるが、官営広島鉄山の場合、1)社会事業的・恩恵企業性格をもって生産を開始したこと、2)労働組織、給与形態等は旧態依然たるものであったこと、など経営に前近代的・非合理的側面を含んだことが、技術改良自体の限界と重なって、明治23、24年以降経営内容の悪化をもたらしたとされている。そのほか、小規模分散作業場の集合体という経営形態に起因する効率の悪さ、官営企業の組織・職制などが生産費を上げ、官営鉄山を衰退せしめた内部要因としてあげられている。日本鉄鋼史編纂会編「日本鉄鋼史(明治篇)」69~84頁、野原建一「中国地方の諸鉄山」49~54頁、向井義郎「官営広島鉄山とその経営」308~351頁、野原建一「明治前期和式(たたら)製鉄業の危機——山陰地方を中心として——」(社会経済史学36-2、1970)81~82頁。

(13) 日本鉄鋼史編纂会編「日本鉄鋼史(明治篇)」79~83頁、飯田賢一「洋式高炉の移植と釜石鉄山」334~335頁、同「わが国における近代製鉄業の夜明け」13頁、野原建一「中国地方の諸鉄山」51頁。

近世鉄山業の研究動向と展望(一)

産構造に内在していた矛盾が露呈してきたこと、等が⁽¹⁴⁾挙げられている。前記の「問題意識」の稀薄化という傾向は、主観的にはともかくも客観的には、洋鉄輸入、洋式製鉄技術導入以降、砂鉄による鑪製鉄業が概ね一様に衰退の途を辿ったという、なによりもまず素材的・技術的要因による衰退という事情と必ずしも無関係ではないと思われる。⁽¹⁵⁾

それに対して、とりわけ「社会経済史的」な最後の要因は野原建一氏の強調されるところであるが、技術・規模・形態の上では——そして特に基幹部門に於いては——マニファクチュアの特徴を示しつつも、「資本」と山内専属労働者との関係に寧ろ奴隷制的(乃至農奴制的)なものを残し、領主権力と「共生関係」に立って高冷単作地帯の農民に「恩恵的」副業労働の機会を提供する一方、その「村抱え的」再生産基盤＝低廉豊富な副業労働力の確保によって低い生産性をカバーする前期的・土豪的資本による経営(そうした形で初めて存立可能であり、またそこから生ずる技術的停滞)、という近世鉄山業に関する研究史上の性格規定が⁽¹⁶⁾この点に対応する。若干の例外を別として、鑪製鉄業が洋式製鉄技術の導入、鉄山業をとりまく事情の変化への対応を充分なし得ずに衰退していった背後には、更に近世における機械・器具工業の未発達と、幕末(嘉永・安政年間)以降軍事的な必要から佐賀、薩摩、伊豆、土佐、山口、水戸、南部等の諸藩・幕府が反射炉(溶鉄炉)、洋式高炉

(木炭溶鉄炉)を建設し、その技術・設備が「官有官営」として明治政府に受けつがれ「工業化」の主軸を形成していったという日本の資本主義発展の「型」の問題をも想定できるが、このような村落共同体の維持・利用に志向した旧来の生産構造、生産力基盤が内部的にそれを不可能にしたという側面があることも事実である。近世鉄山業が山村で閉鎖的に営まれたことと相まって、旧い社会構造を維持すべく作用したとされるのはこの点にかかわっているものであり、それ故に移行地帯村落は「アジア的」な社会構造を解明する鍵ともされるのである。⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾

ところで武井博明氏の一連の労作は、このような生産構造の特質を前提とし、それを正当に位置づけながらも、同時に労働者の性格や流通形態の上で近世鉄山業に大きな変化がみられたことを明らかにした。武井氏は近世砂鉄精錬業史の段階区分として、(1)中世豪族的经营・初期豪商の流通、(2)「名田地主」的经营・城下町特権商人的流通、(3)村方小地主的经营・大坂鉄商人による全国的流通の確立、(4)「豪農」的经营・全国廻船による鉄の流通の盛大、(5)寄生地主的经营・大坂特権商人的流通の解体・全国廻船による鉄の流通の圧倒、という经营、流通の類型変化を構想されていたという。⁽¹⁹⁾そこでは、生産構造の特質をより静態的に、一般化された形で解明された向井義郎氏までの一連の先駆的業績と問題提起が発展的に受け継がれて、時系列

注(14) 野原建一「たたら製鉄業の衰退」(前掲「鉄鋼」第一部、序章、第五節)28～30頁、同「中国地方の諸鉄山」43～46頁、同「明治前期和式(たたら)製鉄業の危機」。

(15) 飯田賢一氏、野原建一氏は鑪製鉄業(法)と近代製鉄業との間の「断層」にも拘らず、両者を正当に位置づけながら連続的に捉えることの必要性を指摘されている。飯田賢一「近代製鉄技術史研究の立場からみた『たたら製鉄』について」26頁、野原建一「明治前期和式(たたら)製鉄業の危機」63頁。

(16) 後に述べるように、こうした性格規定は尾高邦雄氏以降、藤田五郎氏、向井義郎氏、今井福蔵氏、岩永実氏、武井博明氏、野原建一氏等全ての研究者が、多かれ少なかれ近世鉄山業に一貫して妥当する共通の特色であることを確認している。なお、1)労働者数の多さは寧ろ生産性の低さを示し、2)低・非技術労働者の工程別特化の度合も低い。

(17) たとえば、日本鉄鋼史編纂会編「日本鉄鋼史(明治篇)」4～7、153～155頁、日本学士院(三枝博音)「明治前日本鉄業技術発達史」298～306、318、334頁、飯田賢一「洋式高炉の移植と釜石鉄山」334～338、343～348、360～361頁、藤野保・山本弘文「西南雄藩の洋式工業」328～332、335～337、339～340頁、藤野保「長崎造船所」(地方史研究協議会編「日本産業史大系」8、九州地方篇、1960)343～347頁、飯田賢一「わが国における近代製鉄業の夜明け」15～19頁、トマスC. スミス著、杉山和雄訳「明治維新と工業発展」(東京大学出版会、1971)6～21頁などを参照。武器、農器具、大工道具、生活用具などを鉄の主たる用途とした近世日本においては、「民族の産業的欲求」に基づく「鉄山の技術的変革」(飯田、傍点も同氏)は生じ難く、小規模・非能率的な鑪製鉄業が存続し、南部藩の高炉による製鉄は鋳銭事業を主たる販路としたため、私鉄製造禁止(明治2年)により休山を余儀なくされたことが指摘されている。また——そのことの半面として——幕末のいわゆる「外圧」の中で、洋式技術が主として西南雄藩における藩営洋式軍事工業(鋳砲、造船、その他の造兵)という形で摂取されたことは、これら諸藩の藩権力を強化し、明治維新の際のその大きな役割と西南雄藩＝国家主導型の「工業化」、殖産興業のひとつの基盤となったとされている。

(18) 武井博明「近世鉄山労働者の存在形態」(史学研究66号、1957、後、「近世製鉄史論」所収)139頁。

(19) 武井博明「近世製鉄史論」所収の渡辺則文、有元正雄両氏による「あとがき」337頁。

近世鉄山業の研究動向と展望(一)

的な変化の側面、「発展史的視角」が導入され動態化されると同時に、流通の分析を媒介として全国的な展望のなかに位置づけられたのである。そしてまた、近世鉄山業は藩権力と「共生関係」に立ち、維新以降の特権解消に伴い衰退していくとされるが、同時に幕藩体制下においては、諸国廻船による全国市場への参加によって、大坂鉄問屋・仲買を介する特権商人的流通・幕藩体制の解体の方向に作用したことも、極めて綿密な実証分析を通して明らかにされた。その場合、武井氏がその契機として指摘されるのは地方の鉄加工業の新たな発展であり、それを起点として一連の流通構造の変化が波及的に生じたとされている。⁽²⁰⁾

さて、以上に述べたところが第四期から第五期にかけての研究動向の主たる内容をもなしているが、なお研究史における第五期の特徴として、第四期までにおいて明らかにされた「山内」を中心とする生産構造の分析をふまえて、生産手段生産部門として鉄山業と「地域社会」・社会経済生活との結びつきを媒介する加工業の実態、藩の殖産興業政策との関連、鉄山稼行地帯の村落構造との関連、農民による副次部門の実態等の様々な問題領域から、ヨリ個別的・実証的な近世鉄山業の研究が行われたということを挙げる事ができよう。⁽²¹⁾このような問題諸領域は、既に早く小野武夫氏、

尾高邦雄氏、堀江保蔵氏、原伝氏、庄司久孝氏、藤田五郎氏、今井鍾蔵氏等の研究においてその方向が示されていたものであり、その延長線上に立つものであるが、同時に岩永実氏、向井義郎氏による総合化と問題提起が、その後の研究の展開のひとつの起点、研究史上の一分岐点をなしていると思われる。本稿では、対象を近世中国地方の鉄山業に関する「社会経済史的」研究に限定し、且武井氏の「近世製鉄史論」を中心として、以上の研究動向の具体的内容の整理と若干の展望の指摘を行うことにしたい。その場合、研究史の展開は基本的な諸論点をめぐる論争という形を必ずしもとっておらず、従って以下では既に確認された事実に基づいてひとつの理念型的な姿をも紹介することを目的とするが、また決してそれ以上のものではないことも予めお断わりしておく。

II. 民営鉄山業

まず、鉄師の出自、「資本」形成、山内専属労働者の性格、稼行地帯村落との関係等に焦点を絞って、民営鉄山業における経営の性格、いわば「生産構造」がどのように捉えられてきたか、検討してみることにしよう。

注(20) 従来の研究史における「発展史的視角」の欠如とその必要性は、武井氏が強調されたところである。武井博明「近世後期鉄山労働者に関する一、二の問題」(たたら研究10号, 1963, 後、「近世製鉄史論」所収) 157~158頁, 同「近世初・中期における鉄山労働者について」(地方史研究68・69号, 1964, 後、「近世製鉄史論」所収) 109~110頁。

(21) 流通に関する一連の論文のうち、特に、武井博明「大坂鉄座の意義」(1)(2)(芸備地方史研究, 54, 58号, 1965), 同「近世後期における鉄の流通について」, 同「化政・天保期における鉄の流通について」(たたら研究会編「日本製鉄史論」所収, 1970), 後、いずれも「近世製鉄史論」所収。

(22) 武井博明「大坂鉄座の意義」231頁, 同「化政・天保期における鉄の流通について」266, 294~296頁。

(23) 武井博明「近世鉄山業史研究の問題意識」19頁。加工業では農具(千歯)産業について松原高広氏が、村落構造との関連については武井博明氏が、副次部門では特に鉄穴経営について武井博明、片田朋子両氏が、それぞれ中心となつて研究をすすめられた。

(24) 小野武夫「出雲の三名族——田部家、絲原家及び桜井家に就て——」(農業経済研究4-2, 1928, 後、同「日本兵農史論」所収, 有斐閣, 1938——以下の引用は「日本兵農史論」による), 堀江保蔵「松江藩の製鉄業政策」(経済史研究26号, 1931), 同「鳥取藩の鉄類江戸直送と境融通会所」(経済史研究41号, 1933), 後、いずれも同「我国近世の専売制度」所収(日本評論社, 1933——以下の引用は本書による), 原伝「松江藩の製鉄業と農業との関係」(経済史研究11-1, 1934, 後、同「松江藩経済史の研究」1934——以下の引用は「経済史研究」による), 尾高邦雄「職業と生活共同体——出雲地方の鉄山について」(民族学研究3-2, 1947, 後、同「職業と近代社会」所収, 要書房, 1948——以下の引用は「職業と近代社会」による), 庄司久孝「たたら(鑪)の経営形態より見たる出雲・石見の地域性」, 同「たたら歴史地理学的研究」, 同「鑪より見たる近世中国山村の社会経済構造——石見国波佐村庄屋文書を中心に——」(史林37-6, 1954), 藤田五郎「農奴主的マニファクチュアの基盤」(商学論集20-3, 1951, 後、同「封建社会の展開過程」所収, 有斐閣, 1952, 御茶の水書房, 1971, 以下の引用は全て1971年版による), 今井鍾蔵「江戸時代中期における鉄山経営と鉄山師の性格」(法経会論叢14号, 1955)などの先駆的業績。

(25) 岩永実「鑪製鉄の生産構造」, 向井義郎氏の一連の論文、特に「中国山脈の鉄」, 「たたら研究会について」, 「近世鉄山業の問題」。

近世鉄山業の研究動向と展望(一)

鉄山業史におけるひとつの大きな変化として、鉄需要の増加に伴いほぼ室町期を画期として、鉄山族＝漂泊民により行われ、原料所在地を求めて絶えず移動したとされている小屋掛乃至露天の小規模・簡易な「野鑪」(三日鑪)から、鉄師のもとに専属労働者が高殿を中心とした一連の施設からなる「山内」を形成し、遙かに大きな固定資本と高い定着性をもつ大規模な「永代鑪」の形態に移行したことが挙げられる。更に、近世中期以降の農具をはじめとする需要増加を背景として、踏吹→吹差吹子→天秤吹子(天和一寛延年間)という送風装置の改良、銅押鑪の場合の銅塊破碎装置である大銅の発明(宝暦年間)⁽²⁷⁾など、いくつかの技術革新が行われたことが指摘されている。そして周知のように近世鉄山業の基幹部門では、多くは専属の山内労働者

が——即ち、鑪では村下の指揮下に炭炭、炭炭、番子等が、鍛冶屋では大工の指揮下に左下、吹指、手子、炭炭等が——分業に基づく協業の形態で作業に従事し、家族を含めた山内労働者数が鍛冶屋で五、六十～二百数十人、鑪では概ね二、三百人乃至それ以上に及んだところから、日本資本主義論争の中でマニファクチュアの事例として取挙げられて以来、少なくとも技術・規模・形態の上ではマニファクチュアであるということが「農奴的」、「特権的」マニファクチュア等の形で表現されてきた。従って、近世以降の鉄山業の経営にあたっては、このような設備の購入・構築と多量の原料(砂鉄・木炭)及び労働者用飯米・その他の確保のために操業以前の段階で多額の資本を要したが、その場合鉄山業と総称されるものの内には、鉄穴

- 注(26) 尾高邦雄「職業と生活共同体」156～163頁、庄司久孝「たたら(鑪)の経営形態より見たる出雲・石見の地域性」1頁、同「たたら歴史地理学的研究」119頁、岩永実「鑪製鉄の生産構造」272～273、280頁、日本学士院(三枝博音)「明治前日本鉄業技術発達史」68頁、向井義郎「中国山脈の鉄」171～172、199頁、森嘉兵衛「南部の鉄工業」253頁、石塚尊俊「鑪——出雲菅谷鑪の場合——」(鳥根県教育委員会「菅谷鑪」所収、後、石塚尊俊「鑪と鍛冶」所収)71～75頁、同「採鉄冶金の民俗」(1971、同「鑪と鍛冶」所収)28～29頁。ただし、「永代鑪」が一般化するのには近世以降であり、それは生産量の増大と地域の特化を伴ったとされている。なお、中世までの金屋＝鑪師が——特に地方においては——精錬・鍛冶・鋳物師兼営の形態をとり、且原料所在地を求めて漂泊・移動する技能の徒の集団であり、それが近世に入って土着豪族である鉄師＝鉄山経営者のもとに従属・吸収され山内を構成していく、という見解について、尾高邦雄「職業と生活共同体」156～163頁、岩永実「鑪製鉄の生産構造」270～273頁、森嘉兵衛「南部の鉄工業」253～254頁、石塚尊俊「採鉄冶金の民俗」40～45頁、同「鑪——出雲菅谷鑪の場合——」74～75頁などを参照。
- (27) 依国一、前掲書「明治時代における古来の砂鉄製錬法」49～53頁、尾高邦雄「職業と生活共同体」162～163頁、庄司久孝「たたら歴史地理学的研究」122頁、日本学士院(三枝博音)「明治前日本鉄業技術発達史」194～199頁、向井義郎「中国山脈の鉄」172～173頁、武井博明「近世鉄山業の鑪について」(たたら研究6号、1961、後、「近世製鉄史論」所収)85～100頁、野原建一「中国地方の諸鉄山」49～50頁。天秤吹子の使用は所要人員を半減し、生産性を飛躍的に高めたとされている。
- (28) 尾高邦雄「職業と生活共同体」162～163頁、向井義郎「中国山脈の鉄」174頁、野原建一「中国地方の諸鉄山」50頁。そのほか、近世以降の「鉄穴流し」法による砂鉄採取も製鉄史上の重要な技術革新とされている。日本学士院(三枝博音)「明治前日本鉄業技術発達史」139～145頁、立川昭仁「鉄の放浪記」(同「鉄」所収)154～156頁。
- (29) 労働組織・職制については、依国一、前掲書「鉄山秘書」第六、第七(118～175頁)に詳しく、その一部は結城次郎・磯貝勇「中国地方における砂鉄製錬法の史的研究」68～88頁にも収録されている。なお、労働組織、山内人数等については、尾高邦雄「職業と生活共同体」166～175頁、石塚尊俊「鑪師の社会」(第2回日本民俗学会年会(1950)発表、1971年補筆、同「鑪と鍛冶」所収)156～161頁、向井義郎「広島藩の鉄山格式及條目」(史学雑誌63-8、1954)54頁、同「鉄山経営における鉄師と村方との関係」(鈴峯女子短大研究集報1、1954)22頁、同「近世における鉄山経営の形態——芸州佐々木家の鉄山業を中心として——」(史学研究59号、1955)57～59頁、同「中国山脈の鉄」171～178、198～199頁、岩永実「鑪製鉄の生産構造」274、281頁、野原建一「たたら製鉄業の生産構造」(前掲「鉄鋼」第一部、序章、第三節)21～23頁などを参照。
- (30) 服部之総「明治維新の革命及び反革命」(「日本資本主義発達史講座」五所収、1933、後、「服部之総著作集」I所収、理論社、1955)14～20頁、同「方法及び材料の問題」(「歴史科学」1933年8月号、後、「服部之総著作集」I所収)197～222頁、同「『敵マニ』時代の歴史的條件」(「歴史科学」1934年3、4月号、後、「服部之総著作集」I所収)257～261頁、同「マニファクチュア論争についての所感」(講演(1952)、福島大学「商学論集」21-3所収、後、「服部之総著作集」I所収)303～306頁、土屋喬雄「徳川時代のマニファクチュア」(「改造」1933年9月号、後、同「日本資本主義史論集」所収、育生社、1937)156～158頁、平野義太郎「自由民権」(「改造」1933年12月号、後、同「ブルジョア民主主義革命」(新版)所収、法政大学出版局、1968)277～281頁、などにおいて中国地方の砂鉄精錬業が取り上げられたが、そこでは1)砂鉄精錬業をマニユの指標とすることの妥当性、2)マニユ採山の基準、特に「落岩」

近世鉄山業の研究動向と展望(一)

流から鍊鉄(庖丁鉄)製造に至るまでの全工程を一鉄師のもとで行う一貫経営、基幹部門二工程の兼営、或いはどちらか一工程のみの単独経営等々の形態があり、更に農具等を製造し鉄山業には含まれない「地下」(村方)の小鍛冶が存在したという内容の多様性に留意することが——以下との関連でも——必要であろう。

一、生産構造

(1)鉄師＝鉄山経営者の系譜(出自)

鉄師＝鉄山経営者の系譜や性格に関しては早くから小野武夫氏、尾高邦雄氏等により、その特殊性が指摘されていたが、その後庄司久孝氏、今井錦蔵氏、岩永実氏等によりそれぞれ二つの類型に類型化され、更に向井義郎氏の総合化のなかで三つの類型にまとめられた。まず前者についてみると、庄司氏は「出雲」型(土豪地主的大土地所有に基づく大経営)及び「石見」型(商業・金穀貸付・醸造業による資本蓄積に基づく小経営)、今井氏は「旧型鉄山師」(中世～近世初期に鉄山業を開始した「開拓土着地主」型)及び「新型鉄山師」(中期以降商品貨幣経済の発達に伴い鉄山業に着手した「商人」資本型)、岩永

氏は「土豪的鉄山師」(「中世の武士団が山間に定着し、実力を背景として大地主となり、鉄山師」となったもの)及び「新興鉄山師」(中期以降の商人出身の鉄師)とそれぞれ異なる表現を用いているが、これらは内容上、基本的には次の二類型にまとめることができる。即ち、遅くとも近世初期に鉄山業を開始した、武士・土豪出自の開拓地主による大土地所有を基盤とした経営がその第一であり、商業、金融業、醸造業等により資本を蓄積した商人資本による中期以降の経営がその第二である。このふたつの類型は、向井氏によりⅠ.江戸前半期に支配的な「中世的土豪(農奴主)型」(同族団を率いた中世武士の土着・開拓による小領主的性格をもつ鉄師)、Ⅱ.中期以降抬頭する「前期商業資本型」(新興の農商出身の鉄師)としてうけつがれ、更にⅢ.「農閑稼小鉄師」(後半期、特に幕末期に簇生する新しい性格をもつ小鉄師)が加えられた。

以上の鉄師の諸類型の具体的な事例としては、Ⅰ型は出雲の田部・桜井・糸原、安芸の佐々木・香川、伯耆の木下・古都、石見の三浦等が、Ⅱ型は伯耆の近藤・段塚・緒方、石見の平田・藤間・三宅・藤井、美作の徳山等がそれぞれ挙げられているが、近世後期の出

をいかに評価するかということ、がひとつの論点をなしていた。マニファクチュア論争の経過については、たとえば小山弘健編「日本資本主義論争史」上(青木文庫、1953)66～82頁。その後の研究は寧ろ民営鉄山業を中心として、言う迄もなく遙かに実証的に行われてきているが、藩営鉄山業が郡内有力農民を経営組織に組み込みつつ営まれたものであることが明らかにされる一方、民営鉄山業についても鉄師と領主権力との「共生関係」が指摘されている。また、「鉄師」資本が近代的な資本類型に属するものではなく、その生産基盤、生産関係など質的な側面を考慮に入れた場合、単に「マニファクチュア」の語をもって規定しえないことは一般に確認されていると言ってよいと思われる。なお、片田朋子「戦後における芸備地方鉄山業の研究をめぐって」27～29頁。

注(31) 尾高邦雄「職業と生活共同体」165～166、203～204頁、向井義郎「広島藩の鉄山格式及條目」54頁、同「近世における鉄山経営の形態」56～57頁、同「中国山脈の鉄」167、178頁。

(32) 小野武夫「出雲の三名族」230～242頁、尾高邦雄「職業と生活共同体」164～165頁。

(33) 庄司久孝「たたら(鐵)の経営形態より見たる出雲・石見の地域性」12～17、23頁、同「たたら(鐵)の歴史地理学的研究」125～127頁。

(34) 今井錦蔵「江戸時代中期における鉄山経営と鉄山師の性格」157～159頁。

(35) 岩永実「鑪製鉄の生産構造」273～276頁。

(36) 向井義郎「中国山脈の鉄」180～184頁。

(37) 向井義郎「中国山脈の鉄」180～183頁。なお、Ⅰ型のうち出雲の三家については小野武夫「出雲の三名族」、庄司久孝「たたら(鐵)の経営形態より見たる出雲・石見の地域性」、同「たたら(鐵)の歴史地理学的研究」、岩永実「鑪製鉄の生産構造」、安芸の二家については藤田五郎「農奴主的マニファクチュアの基盤」、向井義郎「広島藩の鉄山格式及條目」、同「鉄山経営に於ける鉄師と村方との関係」、同「近世における鉄山経営の形態」、同「芸備の鉄山師」(芸備地方史研究17・18号、1956)、同「座鉄・鉄株と山県鉄師」(鈴峯女子短大研究集報4、1957)、同「鉄山労働者の争奪と移動規制」(たたら研究会研究紀要創刊号、1958)、同「江戸時代鉄押法による鑪鍛冶屋作業の内容と技法について」(1)、伯耆の二家については今井錦蔵「江戸時代中期における鉄山経営と鉄山師の性格」、石見の三浦家については庄司久孝「鑪より見たる近世中国山村の社会経済構造」を、また、Ⅱ型のうち伯耆の三家については今井錦蔵、前掲論文、岩永実、前掲論文、松尾陽吉「境融通会所と鉄類流通上の諸問題——境融通会所日記を中心に——」(たたら研究2号、1959)、武井博明「化政期鳥取藩における江戸廻鉄趣向について」(たたら研究11号、1964)、石見の平田・藤間・三宅家については庄司久孝「たたら(鐵)の経営形態より見たる出雲・石見の地域性」、同「たたら(鐵)の歴史

雲・能義郡、伯耆・日野郡、備中・上市辺に所在が確認されている「農民的な鋼商人」⁽³³⁾は恐らくⅢ型の典型的な例をなすものであり、また広く散在する小規模鍛冶屋の単独経営等がこれに含まれる。以上の諸類型に関して興味深いことは、Ⅰ型とⅡ型との間には生産構造上根本的な差異がみられず、ともに藩権力と「共生関係」に立つのに対して、Ⅲ型は生産・流通上これらと対抗関係に立ち、「大市場・問屋に直結せず、近隣の鉄師や農具鍛冶屋等と直接結んで小市場圏を形成する」⁽⁴⁰⁾という、いわば小鍛冶(刀鍛冶、及び野鍛冶・百姓鍛冶=鎌鍛冶・鍛冶・鉄鍛冶・釘鍛冶など)等の加工業(村の鍛冶屋的存在から、より大規模なものまで)を媒介とする局地的な流通圏・消費市場との結びつきが指摘されている点である。「農民的な鋼商人」については、松尾陽吉氏、武井博明氏によりその実態が明らかにされた。それによれば持高の上では中・下層農民で、鋼塊を鉄山から買入れ、数人の「鋼造り職人」を雇用して自己の仕事場で鋼造りを行うと同時に、近隣諸国を始めとする相当広範な地域に自ら売捌く「小親方の在郷商人」⁽⁴¹⁾とされており、このほか鉄山周辺には農民による副業的な鋼造りが広くみられるという。その他の事例としては、小規模鉄師が多いとされる石見(邑智郡)では中小農民の共同出資による鑪経営(「寄吹き」)⁽⁴²⁾や简单・小規模な製鉄業(「一夜吹き」)⁽⁴³⁾が行われ、また近世中期以降、播磨・山崎町、曾根、高砂等の問屋・御用商人及び大坂商人が、播磨・実栗郡鉄山業に鉄師として進出していくことが明らかにされているが、前者はⅢ型に属するものであり、後者は以上の三類型とは別の型と

して考えるべきであろう。

(2)「資本」形成・経営の諸類型

以上の研究史の展開に従えば、鉄師は系譜上大きく三類型に分けられ、更にその性格や生産構造の上からはⅠ・Ⅱ型とⅢ型という二類型に帰着することになる。しかし、このことはもとより——こうした類型を設定することの意味を考え合わせるならば——Ⅰ、Ⅱ型を峻別することが他の関連においてはより重要な索出価値をもつという可能性や、Ⅰ・Ⅱ型に関しては寧ろ別の基準に従って類型を再設定すべきであるという主張を斥けるものではない。この点に関しては、当初この鉄師の類型が庄司久孝氏や今井鑑蔵氏においては寧ろ「資本」形成(蓄積)の類型として設定されていた⁽⁴⁵⁾、という事実注目する必要があると思われる。その後の変化は、岩永氏以降類型化の上で系譜——これはもちろん「資本」形成の問題を含んでいるが——という側面が前面に出されたこと、及び「新型」鉄山師が「旧型」鉄山師の支配的な地域に成長し共存することにより、同様の生産構造をもつに至るとする今井氏の指摘が、鉄山移行地帯におけるⅠ・Ⅱ型大鉄師=大山林地主の圧倒的存在という事実認識と結びついて、岩永、向井両氏の総合化のなかにうけつがれたことに基づいて生じたものである。その場合の主たる論点は、系譜上のⅠ、Ⅱ、Ⅲ型という三類型と、「山内労働等の生産構造」上のⅠ・Ⅱ、Ⅲ型(乃至大鉄師、小鉄師)という二類型とが並置的に設定されていること、及びそれらの類型設定がもつ意味、この二点に関連して存在するように思わ

地理学的研究」, 藤井家については岡崎三郎「石見国美濃郡上道川村故障一件について」(たたら研究4号, 1960), 美作の徳山家については定本正芳「美作西北部の鉄山業と地域社会の変貌」(1) (たたら研究3号, 1959), 宗森英之「村方地主制と鉄山経営——美作国真庭郡徳山家の場合——」(岡山史学6・7号, 1960)をそれぞれ参照。

注(38) 松尾陽吉「境流通会所と鉄類流通上の諸問題」16~17頁, 武井博明「近世後期における鉄商人について」(安田女子短大紀要創刊号, 1966) 66~69頁。

(39) 向井義郎「中国山脈の鉄」184頁。

(40) 向井義郎「広島藩の鉄山格式及條目」58~60頁, 同「中国山脈の鉄」184頁(傍点は筆者)。

(41) 松尾陽吉「境流通会所と鉄類流通上の諸問題」16~17頁, 特に武井博明「近世後期における鉄商人について」66~68頁。

(42) 武井博明「近世後期における鉄商人について」66頁。なお、俣国一、前掲書(「鉄山秘書」)171頁。

(43) 松原高広「鉄山業史研究の現代的意義——農業生産力の発展とタタラ製鉄——」(たたら研究14号, 1968) 48頁。

(44) 宇野正瑛「兵庫県実栗郡における近世鉄山業について」30~31頁。これがⅡ型と区別されるべきであるとするのは、Ⅱ型は同時に土着・在地の地主的存在でもあるからである。

(45) 庄司久孝「たたら(鑪)の経営形態より見たる出雲・石見の地域性」12~18頁, 同「たたら」の歴史地理学的研究」125~127頁, 今井鑑蔵「江戸時代中期における鉄山経営と鉄山師の性格」157~159頁。

(46) 今井鑑蔵「江戸時代中期における鉄山経営と鉄山師の性格」159頁。

(47) 岩永実「鑪製鉄の生産構造」276頁, 向井義郎「中国山脈の鉄」180, 184頁。

れる。以下においてはこうした観点から、いくつかの問題点を出してみることにしたい。

まず第一に、向井氏が指摘されたように対領主関係において、また——規模・製品種類という素材的要因に規定されるところが大きい——生産構造や局地的需要と結ぶ流通構造の上で、それぞれ異なった社会的性格を示す点で、Ⅰ・Ⅱ型とⅢ型とは対照的な二類型をなしている。領主権力との関係について言えば、(1)大鉄師の運上銀・寸志銀・冥加銀の上納と領主の「財政的・行政的」見地からの保護の上に両者の「共生関係」が成立したとされているが、このことは大鉄師にとって経営の不安定要因、合理化の阻止条件となった反面、その「資本」形成の上で大きな意味をもつものであった。たとえば家格のある大鉄師に対してのみ行われた鉄山用飯米調達のための年貢米割当＝「為替米」制度や、大鉄師に対する田畑、鉄山(木炭山)の附与等がそれである⁽⁴⁸⁾。更に、(2)「鉄山格式」を通じて小鉄師・小規模鍛冶屋に対する製品種類・生産手段の制限や原料入手上の統制が行われ、また流通統制上、大鉄師の優遇策がとられた⁽⁴⁹⁾。このように対領主関係においてⅠ・Ⅱ型とⅢ型との間に一線が画されていたことは、特に中期以降の安芸・山県郡や松江藩などのように「鉄山株」が固定され、鉄師間の株の売買という形でのみ

経営拡大が可能で新規業者の進出が阻止されていたところでは、小規模鍛冶屋・小鉄師＝小規模業者による経営の拡大を不可能とし、⁽⁵⁰⁾ 鐵株をもつ大鉄師の優位と存続をもたらしたとされている。しかし同時に、Ⅲ型はⅠ・Ⅱ型に比べてより不安定的・非持続的ではあるが、領主権力と「共生関係」に立って発展してきたⅠ・Ⅱ型が既に幕末期に一樣に鉄山経営の不振・破綻をきたしているなかで、近世後期——特に幕末期——以降Ⅲ型が輩出し、その勢いが明治期にも持続すること、Ⅰ・Ⅱ型のなかに洋式技術の導入・設備改良に努め大正年間まで鑛製鉄業を継続した鉄師が含まれること⁽⁵¹⁾、だがそれにも拘らずこの鉄山稼行地帯を特色づけ規定しているものは、Ⅰ・Ⅱ型の鉄師による広大な土地——特に山林——集積とそれを基盤とする経営類型であること、等々が確認されていることは興味深い。⁽⁵²⁾

ところで、言うまでもなく、類型は何を基準として設定するかということによって変化し、また基準自体も、その類型を用いて何を解明しようとするのかということによって変化する。そしてこの場合、便宜上Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ型及びⅠ・Ⅱ、Ⅲ型と表現した向井氏による鉄師の類型は、社会的な系譜や性格を基準として設定されたものではあるが、実態に即して「資本」形成や村落構造との関連という観点から、資本・経営類型とし

注(48) 小野武夫「出雲の三名族」269～290頁、原伝「松江藩の製鉄業と農業との関係」117～123頁、尾高邦雄「職業と生活共同体」163～164頁、庄司久孝「たたら(鑛)の経営形態より見たる出雲・石見の地域性」11頁、同「たたら」の歴史地理学的研究」125頁、向井義郎「鉄山経営における鉄師と村方との関係」23～26頁、同「座鉄・鉄株と山県鉄師」69～71頁、同「中国山脈の鉄」179、184～185、187～188頁、岩永実「鑛製鉄の生産構造」277頁、土井作治「貢租と村財政」(「加計町史」上巻、第二編、第一章、第四節、加計町役場、1961)148～150頁、武井博明「鉄業」(「加計町史」上巻、第二編、第三章、第三節)417～419頁、野原建一「近世後期産鉄市場構造の特質」(「たたら研究会編『日本製鉄史論』所収)274～277頁。

(49) 向井義郎「広島藩における鉄山格式及條目」57～60頁、同「中国山脈の鉄」184、192～193頁、松尾陽吉「境越通会所と鉄類流通上の諸問題」16頁。

(50) 堀江保蔵「松江藩の製鉄業政策」229～230頁、向井義郎「座鉄・鉄株と山県鉄師」61～69、74～75頁、同「中国山脈の鉄」188～190頁。

(51) 小野武夫「出雲の三名族」279～284頁、堀江保蔵「松江藩の製鉄業政策」240～241頁、向井義郎「近世における鉄山経営の形態」53～54頁、武井博明「鉄業」440～447頁、脇坂昭夫「商業と金融」(「加計町史」上巻、第二編、第三章、第六節)601～602頁、野原建一「たたら製鉄業の衰退」、同「明治前期和式(たたら)製鉄業の危機」。後述のようにⅠ・Ⅱ型鉄師の鉄山業は必ずしも「一挙の崩壊」という形をとらず、民営鉄山業のままで、或いは官営に移行して、明治・大正期まで存続するが、幕末期における経営不振と藩の大幅な保護は一般に指摘されるところである。

(52) 向井義郎「中国山脈の鉄」180、184頁。

(53) 旧大鉄師による鉄山業の明治期以降の存続は、1)技術改良、新技術の導入、2)古い村落構造＝生産基盤の持続という、それ自体としては背反的な二つの側面に関連があると思われる。日本鉄鋼史編纂会編「日本鉄鋼史(明治篇)」83～84頁、岩永実「鑛製鉄の生産構造」290頁、向井義郎「中国山脈の鉄」182頁、飯田賢一「近代製鉄技術史の立場から見た『たたら製鉄』について」33頁、野原建一「中国地方の諸鉄山」51～54頁、同「明治前期和式(たたら)製鉄業の危機」81～82頁などを参照。

(54) 向井義郎「中国山脈の鉄」179～180頁。

て発生的にみた場合、三類型に関しては系譜のもつ意味が、二類型に関してはⅠ・Ⅱ型内部の差異が、それぞれ少なくとも検討を要する問題点をなしていると思われる。

従って第二に、系譜を基準とする三類型を「資本」形成という観点から取り挙げてみることにしよう。その場合にまず問題となるのは、「資本」形成という視角を設定することの妥当性である。確かに全ての鉄師＝鉄山経営者が同時に自己蓄積に基づく「資本家」であったわけではなかったし、自己「資本」のみによって鉄山業に着手する場合は寧ろ少なかったとされるべきであろう。殊に近世前半期には、Ⅰ型も含めて産鉄の一手販売を条件とする大坂特権商人による前貸や、それに対する藩の規制が行われ、中期以降、自己「資本」率の増大を一契機として経営の拡大をみたとされる事例や、石見国における鉄師と藩との合同資本による「御仕入相合吹の鑪」⁽⁵⁵⁾、幕末期美作西北部鉄山業における鉄師間乃至鉄師と因幡の間屋商人等による共同出資・経営等の事例は、そのことを示すものであり、また近世を通して鉄山経営の不振の原因乃至結果として、多くの場合借銀の累積が指摘されている。しかしなお、この視角からⅡ型との対比に於いてⅠ型という類型を設定することに意味があるとすれば、それはなによりもまず同族団を率いた中世以来の武士・土豪の開拓地主＝小領主的な成長と、その土地所有、農奴主的経営を基盤とする鉄山業という点にかかわるものである。庄司氏、今井氏、岩永氏、向井氏とわけつがれた出雲のⅠ型の三鉄師に関する小野氏の研究は、鉄山業の発展に伴う土地集積をもちろん指摘しつつも、これらの鉄師が中世以来の武士出自で僅少の「恩給地」と「武力的方法」による占有地をもち、また近世には広大な藩有林の無償附与と準武士的待遇をも受けた、開拓地主的存在であることを強調している⁽⁵⁹⁾。この見解

の問題点は、「同族団」、「武力的方法」による占有地等々の多くがあくまで推定であって、実際にどれだけの古い形態の土地所有と生産基盤とをもって鉄山業を開始したのか、具体的に明らかにされていないことである。たとえば安芸・山県郡の佐々木家は武士の出自をもって同じくⅠ型とされ、中期以降鉄山業をはじめとする諸部門(醸造業、金融業、舟運など)の兼営によって土地集積を進め、ひとつの大規模な結合経営を形成するが、鉄山創業期におけるその持高は決して卓越したものではなく、寧ろ鉄山業の拡張と並行した田畑・山林の集積過程を示している。これがⅠ型内部に実際に見られる差異であるならば、両者はその限りでは別の型として峻別されるべきであるし、後者とⅡ型とは——Ⅱ型が在地の農民出自のものである以上——寧ろ類型的に近いものとなる。なお、この点に関して興味深いことは、武井氏が鞆における技術改良の導入を契機として、元禄期に山県郡の鉄師の交替を認めうる可能性を示唆していることである⁽⁶²⁾。

以上の点とも関連するが、第三に「山内労働等の生産構造」を基準とする二類型については、創業期のズレ——それに伴う諸条件をも含めて——が問題となる。研究史の示すところによれば、Ⅰ型の鉄山業の創業期は近世初期乃至それ以前であり、Ⅱ型は後半期、特に後期以降抬頭してくるものとされている⁽⁶³⁾。従って、Ⅰ型とⅡ型の鉄師は——一応地域差を認めた上で——この意味でもそれぞれ異なった村落構造と生産基盤を背景として、鉄山業を開始したと想定することが可能である。その場合、鉄山業(山内労働組織)それ自体に関しては——武井氏の研究により明らかにされているように——Ⅰ型の鉄山経営自体が時系列的な変化を遂げるものであり、また鉄山ごとの売買や鉄山相互間の労働者の移動も行われるのであるから、今井氏、岩永氏、向井氏が指摘されたように、ある横断面をとって見た

注(55) 武井博明「鉄業」432～437頁。

(56) 野原建一「近世後期産鉄市場構造の特質」275頁。

(57) 定本正芳「美作西北部の鉄山業と地域社会の変貌」(I)4～5頁、宗森英之「村方地主制と鉄山経営」101～102、108～109頁。

(58) 向井義郎「近世における鉄山経営の形態」53頁、宗森英之「村方地主制と鉄山経営」109頁、武井博明「鉄業」440頁、脇坂昭夫「商業と金融」601～602頁。

(59) 小野武夫「出雲の三名族」233～247頁。

(60) 今井鑑蔵「江戸時代中期における鉄山経営と鉄山師の性格」157～158頁、向井義郎「中国山脈の鉄」180～181頁などに若干述べられているが、その場合にも極めて一般的な形でしか明らかにされていない。

(61) 土井作治「農業」(『加計町史』上巻、第二編、第三章、第一節)318～320頁。

(62) 武井博明「近世鉄山業の鞆について」97頁。

(63) 前掲、庄司、今井、岩永、向井各氏の諸論文、特に向井義郎「中国山脈の鉄」180～183頁。

場合に「山内労働等の生産構造」に大きな差異は事実みられないかもしれない。しかし村落との関連においては、小農自立をとりまく条件としても、また農民層分解の「型」に対する規定要因としても、それぞれ異なる時点、段階において両者は大きく異なる意味をもったと思われるし、そのことは逆に——特にI型鉄師を狭義に（即ち、「資本」形成という視角から）解釈した場合には——鉄山労働者の析出基盤という点でも異なる影響を及ぼしたと言つてよいであろう。

以上の諸点からも言いうることであるが、中期以降の大鉄師の多くは結合経営形態をとり、村方においては政治的・経済的に重要な地位を占めたのであるから、「資本」形成の問題をふまえつつ、こうした側面も含めて、資本・経営類型としてこれを如何に捉えることができるかということがひとつの問題となる。従来、「山間後進地帯」の「大鉄師」に対しては、近世を通して「大土豪鉄師」＝「大商業高利貸資本」という類型表現が与えられてきた⁽⁶⁴⁾。しかし、どちらかと言えばその鉄師類型に固有の、常に変化することのない一般的傾向性を想定し強調するような類型設定に関しては、流通との関連をも含めた経営類型として、武井氏が提起されたような時系列的な変化がみられないのかどうか、また、この点、三類型のそれぞれについてはどうか、という課題が残されている。

(3) 労働者の性格——山内専属労働者——

鉄師の系譜についてと同様、山内労働者の特異性も早く小野武夫氏、尾高邦雄氏等により指摘されたところであるが、その後の研究は一般的な研究動向と対応して大きくふたつの方向に展開していった。まず、従

来の研究に基づきつつ、鉄師と山内労働者との関係、それに対する藩の統制・関与などを通して山内の具体的様相を明らかにし、その後の分析の基礎をつくられたのは向井義郎氏である。そこでは——小野氏、尾高氏等の研究をも含めて——山内労働者のあり方はほぼ次のような形で、一般的様相として描き出されていたと言つてよいであろう。

即ち、(1)山内労働者は、製鉄を部族的職業とする「鉄山族」の子孫とも言うべきものであり、同職性＝同族性という二重の共同感情と独特の労働組織とをもつて、職業的内婚制による世襲的・封鎖的な集団を形成した⁽⁶⁵⁾。

(2)山内労働者は「鉄山譜代之者」であり「荷主（＝鉄師）買切之もの」と表現される奴隸的存在であつて、鉄師から給銀と季毎の差引決算の形で米・銀を前貸されたが、未進に新貸を累積して借金・債務奴隸の状態におかれていた。更に日用必需品が鉄師から支給される一方、商人の「山内」への出入が禁止乃至制限され、商品経済との接触を断たれて自然経済の状態におかれていた⁽⁶⁶⁾。

(3)山内労働者は藩（「鉄山格式」）→鉄師（「条目」）により移動を強く規制され、「山内」に緊縛されて日常生活全般の拘束を受けた。鉄師は領主から「山内」の宗門人別改と刑事裁判の特権を与えられ、こうして柵や垣で囲まれ「地下」＝地元村落から隔絶された、私刑の及ぶ「治外法権的」領域を構成した。このような鉄師と山内労働者との関係は、「親分子分の擬血縁的支配」関係、「中世的オヤカタ・コカタの関係」と規定しうるものである⁽⁶⁷⁾。

「山内」・山内労働者の世襲性、閉鎖性、隷属性を強

注(64) 向井義郎「広島藩の鉄山格式及條目」63頁、同「鉄山経営における鉄師と村方との関係」12、27頁、同「近世における鉄山経営の形態」64頁など。

(65) 小野武夫「出雲の三名族」252～255、226～277頁、尾高邦雄「職業と生活共同体」156～210頁。

(66) 小野武夫「出雲の三名族」255頁、尾高邦雄「職業と生活共同体」156～161、172～175、178、202～205頁、石塚尊俊「鐵師の社会」161～176頁、同「技能集団の封鎖性と漂泊性——中国山地の鍾部落において——」（日本民俗学会「民間伝承」15-1、1951）、向井義郎「中国山脈の鉄」197～198、199～200頁。

(67) 小野武夫「出雲の三名族」252～254頁、尾高邦雄「職業と生活共同体」168～169頁、藤田五郎「農奴主的マニユファクチュアの基盤」332頁、向井義郎「広島藩の鉄山格式及條目」55～57、61頁、同「近世における鉄山経営の形態」59～62頁、同「中国山脈の鉄」200～202頁、今井鑑蔵「江戸時代中期における鉄山経営と鉄山師の性格」160～164頁、岩永実「鍾製鉄の生産構造」282頁、武井博明「鉄業」414～416頁、野原建一「近世後期「労働者」の諸問題——中国地方たたら製鉄業を中心として——」（経済学年誌6、1969）95～97頁。

(68) 堀江保蔵「松江藩の製鉄業政策」235～236頁、小野武夫「出雲の三名族」255、276～277頁、尾高邦雄「職業と生活共同体」168～169、176～186、202～203頁、庄司久孝「たたら（鍾）の経営形態より見たる出雲・石見の地域性」8～9頁、同「たたら（鍾）の歴史地理学的研究」124頁、藤田五郎「農奴主的マニユファクチュアの基盤」332頁、向井義郎「広島藩の鉄山格式及條目」54～57、60～62頁、同「近世における鉄山経営の形態」62頁、同「鉄山労働者の争

調するこのような一般的な性格規定は、近世を通して多かれ少なかれ妥当する共通の特質であることがその後の研究においても確認されており、武井博明氏も性格規定をより厳密化する形で、職業的な近世鉄山労働者が奴隸的存在であることを確認している。即ち、武井氏は(1)労働力の再生産を基軸とした給付形態(鉄師による全生活必需品の支給。労働量とは無関係に定期的に定額ずつ支給される貸米・貸金と〔実際には支給されない〕「労賃」との帳面上での一季毎の差引決算)＝奴隸的再生産、(2)未進銀の存在を基礎としての隷属関係ではなく、返済とは無関係に「孫々＝至迄永代」働きの契約、(3)経営主相互間で、作業場・諸道具と共に労働者を一括して生産手段の不可分の一構成要素として売買していること、等を根拠に、経営主が労働者を生産手段として所有している関係であり、鉄山経営主の総体＝鉄山労働者の総体が、奴隸所有者＝奴隸という生産関係をと(73)り結んでいることを指摘した。

ところで、このような一般的な性格規定を前提としながらも、更にこの問題を村落構造と関連づけて、そこからの鉄山労働者の析出や鉄山労働者の性格の時系列的な変化を解明することによって鉄山労働者の存在形態を捉え直そうとする、もうひとつの研究史の展開がみられた。これは庄司久孝氏、及び特に藤田五郎氏の分析の基礎をなしていた視角であり、その後岩永実氏や武井博明氏自身によって部分的に取上げられ、研究史の第五期において武井氏の一連の労作に結実したものである。まず武井氏は「世襲的專業的」鉄山労働者

者についてもその家族形態の上で次のような変化がみられることを明らかにし、その後の「発展史的視角」からの分析の布石とされた。即ち、武井氏はそこで(1)近世初期には基本的に山内家族の二、三男より補充されていた非技術労働者が、中期以降鉄山業の規模の拡大に伴い、「買切」の譜代的「雇傭」形態においては(76)あるが外縁農村から雇傭されるようになること、(2)初期→中期には「山内」は一般に技術労働者のみを単位とし、非技術労働者は傍系親としてその中に包摂されるような、身分的差別を伴った家族形態で構成されていたが、後期には非技術労働者をも含め労働者の多くが直系単婚家族形態をとって、等質な単位として山内を構成するようになること、を指摘している。次いでこの第一点がより一層展開され、村落構造の変化と鉄山労働者の存在形態の変化との関連が、労働力の析出基盤という観点から解明された。周知のように、藤田五郎氏が「名子・譜代下人を使用する農奴主的地主の崩壊→質物・年季奉公人の創出」の前提としての本百姓＝家族自営的農民の一般的形成という視角から、先進・中間・後進地帯という類型分析を通して、近世日本における「近代的」進化が中間地帯を基軸として展開されることを明らかにされた際、鉄山稼行地帯村落は農奴主的地主→再編農奴主的地主という動向を示す後進地帯の事例として取上げられている。そこで藤田氏は、(1)文政期の鉄山稼行地帯村落の「無高浮過」の大半は、鉄師＝農奴主的地主のもとでの居村の鉄山労働者であること、(2)その浮過は、「一軒前」の本百姓

奉と移動規制、同「中国山脈の鉄」171、200～201頁。今井鍾蔵「江戸時代中期における鉄山経営と鉄山師の性格」161～162頁、岩永実「鑛製鉄の生産構造」281～282頁、森嘉兵衛「南部の鉄工業」280頁、野原建一「近世後期『労働者』の諸問題」87～94頁。

注(69) 武井博明「近世鉄山労働者の存在形態」、同「近世後期鉄山労働者に関する一、二の問題」、野原建一「近世後期『労働者』の諸問題」、同「たたら製鉄業の生産構造」など。

(70) 武井博明「近世鉄山労働者の存在形態」142～144頁。

(71) 武井博明「近世鉄山労働者の存在形態」144～149頁。なお、同「鉱業」415頁。

(72) 武井博明「近世鉄山労働者の存在形態」149～150頁。なお、同「鉱業」416～417頁。

(73) 武井博明「近世鉄山労働者の存在形態」151頁。

(74) 庄司久孝「鑛より見たる近世中国山村の社会経済構造」、藤田五郎「農奴主的マニファクチュアの基盤」。後に述べるように、庄司氏の「たたら(鑛)の経営形態より見たる出雲・石見の地域性」、「たたら」の歴史地理学的研究は、鉄山業を「地域社会の構造」との関連で問題としているが、「山内」に関する限りでは恒常的に捉えている。

(75) 岩永実「鑛製鉄の生産構造」282、285頁、武井博明「近世鉄山労働者の存在形態」152～153頁。

(76) 武井博明「近世八幡高原における鉄山経営」178～185頁。

(77) 武井博明「近世八幡高原における鉄山経営」178～196頁。

(78) 藤田五郎「封建社会の展開過程」201～386頁。

(79) 藤田五郎「封建社会の展開過程」284～345頁。

(80) 藤田五郎「農奴主的マニファクチュアの基盤」323～324頁。ここでは、1)山内専属労働者と出稼・日雇労働者、及び2)技術労働者と非技術労働者、というふたつの区別がなされていない。

近世鉄山業の研究動向と展望(一)

の分解のなかからではなく、⁽⁶¹⁾「帳請人＝隷属農＝農奴的存在の農民」の家族から、そのまま鉄山労働者として放出されたものが主流であること、を指摘されたが、その後の研究によりこの分析は「地詰帳」・「差出帳」の操作(帳請人の解釈)⁽⁶²⁾の上で、また浮過＝居村の鉄山労働者とする点で、それぞれ誤りを含むものであることが確認された。しかし武井氏の分析は、方法的には明らかに藤田氏の分析視角に立つものである。

さて、まず近世初期→中期についてみると、(1)初期の農村構成の中心は、数軒の屋敷を請け名子・下人を有する1町5反以上層による農奴主的経営であり、鉄山業の低・非技術労働者は鉄師＝農奴主的地主の家族内に「下人」形態で含まれる一方、技術労働者は田畠屋敷を保有して農業経営を行う。⁽⁶⁴⁾(2)中期には家族員数3、4人で1～5石の単婚小家族経営が村落構成の中心となるが、これはヨリ家族員数の多い農家から下人・傍系親が分出され、自立化することにより、家族員数の減少と農家数の増大がみられたことの結果である。そして自立しながらも再生産が不可能な零細高持(無高)の家長、及び村落内では自立しえなかった家持下人・下人や3石以上層の傍系親が、それぞれ出稼及び譜代の鉄山労働者として放出され、山内の単独労働者の相当部分を構成したが、いずれも隷属農民の自立化過程を媒介としているものの、小農として自立しえない隷属農民の鉄山労働者化が基本的コースである点

で不十分なものであり、農業経営内での隷属的性格が鉄山経営内にも継承される。⁽⁸⁵⁾次いで後期については、(1)農民層分解の進展している村ほど鉄山労働者の析出が多く、「無作層」の相当部分が鉄山稼(居村内)・鉄山出稼に従事していること、⁽⁸⁶⁾(2)鉄山労働者の半数以上が村方出生者であるが、技術労働者には世襲的・専門的労働者が多く、低技術労働者は大半が、非技術労働者は全てが、村方から供給されていること、⁽⁸⁷⁾(3)契約面では、技術労働者の存在形態は譜代→年季(賃奉奉公人的)→成捨(居消費奉公人的)という変化をみせ、非技術労働者の存在形態の変化との対応が想定されること、⁽⁸⁸⁾(4)村下・大工を頂点とする姻戚関係による「山内」の構成・秩序の規制と技術体系の掌握とが、鉄山労働者の「古さ」を存続せしめる要因であること、⁽⁸⁹⁾が指摘されている。

以上において概観したように、武井氏の綿密な実証分析によって鉄山労働者の具体的な存在形態とその推移とが解明されたことにより、従来の「山内」・山内労働者の一般的特質を強調する見解は大幅に書き換えられた。また、村落構造との関連が労働者の析出基盤という観点から時系列的に辿られることにより、農村構造の中に位置づけられつつ鉄山業そのものの変貌の過程が明らかにされた。しかし、労働者の出自、家族形態、雇用契約等々の変化が非技術・低技術・技術労働者別に解明された反面、「山内」全体の様相がどのように変化していったのかという点については、なお残さ

注(81) 藤田五郎「農奴主的マニファクトリアの基盤」321～325頁。

(82) 寺島洋一「安芸国名寄帖の一考察——山県郡加計地方における帖請人について——」(歴史学研究170号, 1954)。なお、芸備地方史研究会「戦後における広島県地方史研究の成果と課題」(I)32頁(武井博明)。

(83) 前記の労働者の区分の欠如は別としてもなお、向井義郎「近世における鉄山経営の形態」62頁、武井博明「近世八幡高原における鉄山経営」180～181頁、などを参照。この点は片田朋子氏が、「戦後における芸備地方鉄山業の研究をめぐって」27～28頁、において指摘されている。

(84) 武井博明「近世初・中期における鉄山労働者について」111～118、128～132頁。ここに言う初期とは慶長・元和期を指す。

(85) 武井博明「近世初・中期における鉄山労働者について」119～128、132～136頁。ここに言う中期とは元禄・享保期を指す。なお、武井氏は初期→中期に初期の小農鉄山労働者＝技術労働者は鉄山労働者たることを止め、「下人」的低・非技術労働者が鉄山労働者として専門化すると述べておられるが、このことは少なくともこの時点における技術労働者の系譜上の断絶を認めることを意味し、従来技術労働者の世襲的性格が強調されてきたことと対照をなしている。136頁を参照。

(86) 武井博明「近世後期鉄山労働者に関する一、二の問題」164～166頁。ここに言う後期とは幕末期を指す。

(87) 武井博明「近世後期鉄山労働者に関する一、二の問題」159～164頁。

(88) 武井博明「近世後期鉄山労働者に関する一、二の問題」167～171頁。なお森嘉兵衛氏も、近世末期には鉄山の「一般労働者」の存在形態が賃奉奉公契約→居消費奉公契約→年奉奉公契約→(高炉の場合)前貸的基本給に出来高払賃銀制を加味した労務契約、という形で変化することを、東北地方の事例によりつつ指摘されている。森嘉兵衛「南部の鉄工業」281～283頁を参照。

(89) 武井博明「近世後期鉄山労働者に関する一、二の問題」171頁。以上の武井氏の分析に関連して、特に同氏の「近世八幡高原における鉄山経営」185～186頁の問題設定を参照。

れた課題が多いし、また雇用契約の変化についても今後より多くの史料分析の積み重ねが必要であろう。なお村落構造との関連について言えば、藤田五郎氏が取挙げた同じ地域の農村構造の変化が、土井作治氏により次のように解明された。即ち、初期の小家・部屋を包摂する複合大家族形態の初期本百姓とその経営が解体して、元禄・享保期にかけて、小家・部屋の分出＝血縁分家を主流とする本百姓の一般的形成と単婚家族労働力による手作り経営の創出がみられ、更に享保以降、農民の階層分化の激化と浮過層の創出が顕著になるということであり、ここでは藤田氏の見解とは逆に、本百姓の一般的形成をふまえた浮過の創出が指摘されている⁽⁹¹⁾。いずれにせよ、近世中期の鉄山労働者の析出に関する分析と同様、中期以降のいわゆる「無高浮世過層」の鉄山労働者化についても、「商品生産の発展→農民層分解→浮過層の創出・鉄山労働者化」という形においてではなく、その創出過程や村落内での存在形態との関連で、即ち商品生産や農民層分解の「型」との関連で、問題とされるべきであろう⁽⁹²⁾。このことは、小農自立期と相前後して鉄山業の規模拡大と鉄師の土地集積が進行し、大鉄師の多くは村方の大土地所有者であると同時に、多角的な結合経営主でもあるということからも言えるのである。更に付言すれば、この点は上記の結論が一部大鉄師の経営分析を中心として得られたものであるということとも関連があるであろう。確かに「山内」や山内労働者の性格の共通性は一般に指摘されるところであるが、村落構造との関連をも含めて、こうした性格規定はある程度まで類型化しうるものである、という可能性が必ずしもないとは言えないからである。

(4) 稼行地帯村落との関係

ヨリ広範に原料が分布し、且一般農民が関連副業労働にたずさわるため、鉄山業は稼行地帯村落に対し他の鉄山業よりも遙かに大きな影響を及ぼすとされ、研究史においても、堀江氏以降の殆どの研究者がなんらかの形でこの問題を扱っている。鉄山稼行「地帯の政治、経済、文化を語る場合、かかる鉄山業の存在、鉄師と山内労働者、村方農民の関係の特性とその生態を予め理解しておかないでは不可能といえる程」であるという向井氏の指摘は、研究者のこの問題に対する関心の深さを象徴的に示すものである。そして、株小作等の形態をとる大土地所有者＝大鉄師の中国地方山村における圧倒的存在という事実認識と、その社会構造の特殊性を近世鉄山業の分析を通して解明しようとする問題意識とが、多かれ少なかれ全ての研究者に共通して見られたが、この視角から特に自覚的に体系的な分析を進められたのは庄司氏と向井氏である。

ところで、この点に関しても——「山内」・山内労働者の把握の仕方に対応して——研究は大きくふたつの方向に展開していった。即ち、第一の立場は鉄山業（「山内」）と稼行地帯村落（「地下」）との関連を農民の副業的労働給付・その他を通して、一般的様相の局面において包括的に捉えることにより、鉄山業を中心とする村落構造の再生産を構造的に解明しようとするものであり、これは堀江氏、原氏、尾高氏、向井氏、今井氏、岩永氏、武井氏と研究が蓄積され、且向井氏及び武井氏により体系化された。その後の田部氏、野原氏等の研究も、この立場に立つものである。これに対して、第二に鉄師を中心とする稼行地帯村落における鉄

注(90) そのほか注目すべき点として、石塚尊俊氏は1)「山内」での村下を中心とする職種の一子相伝と並んで、「代がわり」に伴う職種の転化がかなりみられること、2)鉄師(山内労働者)間の婚姻が支配的であった状態から、時代を下るほど鐵師家と非鐵師家の通婚関係の比重が高くなること、を指摘されている。石塚尊俊「鐵師の社会」161～165、171-173頁。

(91) 土井作治「階層構成とその分化」(「加計町史」上巻、第二編、第二章、第一節)、同「農業」。なお、芸備地方史研究会「戦後における広島県地方史研究の成果と課題」(I)33～34頁(武井博明)。

(92) また、この点と関連して「小農自立」の内容も問題となる。

(93) 鉄山業の規模拡大も鉄師の土地集積も、近世中期以降顕著になるとされている。

(94) たとえば、小野武夫「出雲の三名族」242～247頁、庄司久孝「たたら(鐵)の経営形態より見たる出雲・石見の地域性」12～17頁、向井義郎「近世における鉄山経営の形態」43～44頁、同「中国山脈の鉄」181～183頁、宗森英之「村方地主制と鉄山経営」100頁などの事例。

(95) 庄司久孝「鐵より見たる近世中国山村の社会経済構造」81頁、向井義郎「中国山脈の鉄」167頁。

(96) 向井義郎「近世における鉄山経営の形態」64頁。

(97) 堀江保蔵「松江藩の製鉄業政策」、原伝「松江藩の製鉄業と農業との関係」、尾高邦雄「職業と生活共同体」、向井義郎「広島藩の鉄山格式及條目」、同「鉄山経営における鉄師と村方との関係」、同「近世における鉄山経営の形態」、同「座鉄・鉄株と山内鉄師」、今井鑑蔵「江戸時代中期における鉄山経営と鉄山師の性格」、岩永実「鑪製鉄の生産構

師の資本形成・保有地の拡大、「商品」生産の展開、農民層の分化、地主制の形成、鉄山労働者の析出等の分析を通して村落構造とその変化を明らかにすることにより、鉄山業を稼行地帯の中に位置づけながら、村落構造と鉄山業との相互作用的な関連を段階的・構造的に捉えようとする立場があり、これは庄司氏、藤田氏、⁽⁹⁸⁾岩永氏、宗森氏、武井氏等により研究が進められた。

第一の立場は、鉄山と村方農民との直接的な関連そのものを構造的に把握する。即ち、まず第一の観点から両者の関連領域として指摘されるのは、次のような諸項目である。(1)鉄山業は副業的な労働給付・日雇等の「浮儲」の機会を農民に提供したが、それは 1) 鉄穴流、2) 主として鍛冶屋用の小炭の焼出・運搬、3) 砂鉄採取地—鑪—鍛冶屋—製品搬出地間の原料(砂鉄・鉄)と製品(鋼・錬鉄)の運搬、即ち駄賃〔馬代〕稼、4) 鑪・鍛冶屋の非熟練労働を主とする日雇(臨時の手伝い夫、番子、鑪場の鍋造りなど)、等を中心として構成された。また、(2)農民の私有・共有林の鉄山(木炭山)としての利用も現金収入をもたらした、(3)年貢米を鉄山(山内労働者)用飯米として振向ける「為替米」制度が諸雑用負担の減少等の利点を伴った。尾高氏は、鉄山業(「山内」)の稼行地帯村落(「地下」)に対する「封鎖的」

側面と両者の「依存関係」の側面とを、「一方では相反発し、他方では相牽引する二つの関係」と表現されたが、この表現が示すように、この立場における両者の関係とは「封鎖性」を前提とした「依存関係」であり、鉄山と村方との直接的・具体的な関係である。しかし、向井氏、今井氏、武井氏、野原氏等により、この関係は単なる経済的・機能的な「依存関係」、補完関係を意味するに留まるものではなく、鉄山稼行地帯、即ち「山間高冷で耕地狭小、生産力低位の単作地帯寒村」⁽¹⁰⁰⁾を特徴づけるひとつの分業構造を示すものであることが指摘された。それは、具体的には次のような双面的性として示される。(1)1)炭焼、駄賃稼等を中心とする農閑期の鉄山関係の浮儲は、山間寒村地帯の貧窮農民の救済という意味をもつ「恩恵的副業労働」⁽¹⁰¹⁾であり、また 2) 交通不便で換貨不能な山林資源が利用されて、農業上の利便と「山手銀」収入をもたらした、3) 他所売不可能な悪米が「為替米」⁽¹⁰³⁾制度により処分され、租米運送費が節約されたため、一般に農民は鉄山開設を希望したとされている。⁽¹⁰⁴⁾(2)しかし他面、これらは同時に以下のことをも意味した。1)「恩恵的副業労働」は鉄師にとっては、豊富で安価な副業労働力の利用(「農民収奪」)により、鉄山業の低い労働生産性を補完すると

造」、武井氏の初期の著作である「鉄業」、田部越「近世松江藩領内における鉄山業——特に農民副業としての——」、たたら研究11号、1964)、野原建一「たたら製鉄業の生産構造」、同「明治前期和式(たたら)製鉄業の危機」など。

注(98) 庄司久孝「たたら(鑪)の経営形態より見たる出雲・石見の地域性」、同「たたら歴史地理学的研究」、同「鑪より見たる近世中国山村の社会経済構造」、藤田五郎「農奴主的マニファクトゥアの基盤」、岩永実「鑪製鉄の生産構造」、宗森英之「村方地主制と鉄山経営」、武井博明「近世八幡高原における鉄山経営」、同「近世後期鉄山労働者に関する一、二の問題」、同「近世初・中期における鉄山労働者について」など。なお、武井氏は鉄穴経営の研究においても同じ分析方法をとっている。

(99) 尾高邦雄「職業と生活共同体」209頁。なお、202～208頁。

(100) 向井義郎「近世における鉄山経営の形態」41頁。このような指摘は「商業的農業、加工業の未発達」の指摘とともに一般的である。たとえば、後藤陽一他「山村の歴史——八幡高原を中心として——」403、405頁、河地賢一「八幡高原の人文地理」571～572、575～576頁、いずれも「三段峽と八幡高原」所収。この点は鉄師の「資本」形成の問題とも関連してくるが、地域的・時期的に類型化して捉える必要があるのではないと思われる。

(101) 原伝「松江藩の製鉄業と農業との関係」110、115～116頁、尾高邦雄「職業と生活共同体」203、208頁、向井義郎「鉄山経営に於ける鉄師と村方との関係」11、19～20頁、同「中国山脈の鉄」184～185頁、岩永実「鑪製鉄の生産構造」283～285頁、後藤陽一他「山村の歴史」405～406頁、田部越「近世松江藩領内に於ける鉄山業」13、16～18頁。

(102) 原伝「松江藩の製鉄業と農業との関係」110～111、116頁、向井義郎「鉄山経営に於ける鉄師と村方との関係」12～14頁、同「中国山脈の鉄」186～187頁、岩永実「鑪製鉄の生産構造」283頁、後藤陽一他「山村の歴史」405頁、武井博明「鉄業」442～452頁。なお、鑪山代銀が村費の収入のかなりの部分を占め、その割方が農民にとって重要な意味をもった点につき、岡崎三郎「石見国美濃郡上道川村故障一件について」を参照。

(103) 原伝「松江藩の製鉄業と農業との関係」117頁、向井義郎「鉄山経営に於ける鉄師と村方との関係」14、22～25頁、同「座鉄・鉄株と山県鉄師」69～71頁、同「中国山脈の鉄」187～188頁、岩永実「鑪製鉄の生産構造」285頁。

(104) 原伝「松江藩の製鉄業と農業との関係」116頁、尾高邦雄「職業と生活共同体」208頁、向井義郎「鉄山経営に於ける鉄師と村方との関係」11、21頁、同「近世における鉄山経営の形態」41～42頁、田部越「近世松江藩領内に於ける鉄山業」13頁。

いう意味をもち、また「恩恵的」であるだけに、鉄師の都合に応じて調達された。⁽¹⁰⁵⁾ 2) また、「恩恵的副業労働」のかかなりの部分は、鉄師からの駄賃、馬代、作食米等の借用・前貸金の償却のために行われた強制的なものであった。⁽¹⁰⁶⁾ 3) 藩営や「鉄株」制下の鉄山業においては木炭や砂鉄の売却先が制約され、自由販売・抜売が禁止されて、農民に不利な廉価で特定鉄師に強制的に買収された。⁽¹⁰⁷⁾ 4) 鉄師による「山手銀」を始めとする前貸は、農民にとって年貢納入のための不可欠部分をなしており、「山手銀」の前貸は鉄師の山林集積の契機となった。⁽¹⁰⁸⁾ 5) 「為替米」制度の下での鉄山への「為替米」未進は、鉄師に対する村方の負債として現われ、その共同責任において、共同体的な村の結合の力で鉄山労働への従事が強制された。⁽¹⁰⁹⁾ 6) 以上のことは藩の年貢収取を安定化・簡易化し、山間農村への行・財政的見地から、藩は鉄師と「共生関係」を結び、これを保護した。⁽¹¹⁰⁾ 7) また以上の結果、鉄山稼行地帯には農民の積極的抵抗はみられない。⁽¹¹¹⁾

このように、第一の立場においては鉄山業と稼行地帯村落との関係が、その二面性において構造的に把握されており、それが例えば「農民にとっては『上納』= (貢租) の『足し』= (補充) として意義があり、副業がある事によって零細経営を可能ならしめ、鉄山師にとっては副業である事によってより安価な労働者を得る事であり、領主にとっては貢租の強化を可能ならしめる」⁽¹¹²⁾ 関係(今井)、「(鉄山稼行) 地帯の小農民……は鉄山関係の浮儲(=「恩恵的副業労働」)によって辛くも生計を

維持し、……封建領主側にとっても浮儲を与える鉄山の存在は村方への貢租強化を可能とし、……政治的および財政経済上の観点からも鉄師を保護するを有利とする」⁽¹¹³⁾ 関係(向井)、「村または郷の農民全体を、その村的結合を基盤にしなが、彼(鉄師)の鉄山経営の一部分を担当する労働者として、その経営組織の中に入り組み込んでしま」い、「職業的な鉄山労働者と鉄山師との関係に似せて作られる」⁽¹¹⁴⁾ 両者の関係(武井)、「近村農民……の生活維持という必要に迫られた『副業』……形態は、ある程度の生産性の低さを補完するという働きをも」ち、また、この「山村経済特有の村抱え的地盤の上に成り立」つ「たたら製鉄業」⁽¹¹⁵⁾ (野原)、等々の形で表現されるのである。こうして、第一の立場からの研究史の展開は、貢租体系の不可分の一環として位置づけられた「恩恵的副業労働」、この「村抱え的生产基盤」、「村的結合」の「基盤」に基づく鉄山経営、更にこの鉄山経営を中心とした停滞的な村落構造の再生産、という形において、鉄山稼行地帯の特色を明らかにした。

これに対して第二の立場は、間接的ではあるが構造的にとりむすぶ鉄山業(鉄師)と稼行地帯村落との関係を、段階的・構造的に把握する。即ち、そこでは稼行地帯の村落構造と鉄山業という構造的な相互関連が段階的に追究されるが、このふたつの方向への相互関連の分析は言うまでもなく密接にからみ合い表裏の関係をなしているものの、重点のおき方の相違に従って、ふたつの異なる認識志向を示しているように思われる。

- 注(105) 向井義郎「鉄山経営に於ける鉄師と村方との関係」11~12頁、同「近世における鉄山経営の形態」64頁、武井博明「鉄業」422頁。
- (106) 原伝「松江藩の製鉄業と農業との関係」116頁、向井義郎「鉄山経営に於ける鉄師と村方との関係」15~17、21~22頁、武井博明「鉄業」420~421頁。
- (107) 堀江保蔵「松江藩の製鉄業政策」227~229、234~235頁、原伝「松江藩の製鉄業と農業との関係」118~120頁、向井義郎「広島藩の鉄山格式及條目」58~60頁、同「中国山脈の鉄」186、188~190頁。
- (108) 向井義郎「鉄山経営における鉄師と村方との関係」13~15頁、後藤陽一他「山村の歴史」405頁、武井博明「鉄業」452~461頁。
- (109) 後藤陽一他「山村の歴史」406~407頁、武井博明「鉄業」419~420頁。
- (110) 小野武夫「出雲の三名家」269~292頁、原伝「松江藩の製鉄業政策」121~123頁、藤田五郎「農奴主的マニファクトリアの基盤」325、331、337頁、向井義郎「鉄山経営に於ける鉄師と村方との関係」20、23頁、同「近世における鉄山経営の形態」52~54、64頁、同「芸備の鉄山師」48頁、同「座鉄・鉄株と山県鉄師」64頁、同「中国山脈の鉄」179、184~185頁、岩永実「鑪製鉄の生産構造」276~277頁。
- (111) 向井義郎「鉄山経営に於ける鉄師と村方との関係」26~27頁、同「近世における鉄山経営の形態」55頁、同「座鉄・鉄株と山県鉄師」75頁、同「中国山脈の鉄」197頁。
- (112) 今井鑑蔵「江戸時代中期における鉄山経営と鉄山師の性格」165頁。
- (113) 向井義郎「中国山脈の鉄」184~185頁。
- (114) 武井博明「鉄業」422頁。
- (115) 野原建一「たたら製鉄業の生産構造」21頁。

近世鉄山業の研究動向と展望(一)

まず、(1)武井氏は、村落構造の変化と鉄山業の経営形態の変化、ヨリ具体的には非熟練労働者を中心とする鉄山労働者の析出、そこから生ずる鉄山労働者の存在形態の変化等、両者の関連を主として村落構造→鉄山業という方向において捉え、村落構造の変化に伴う山内の変貌の過程を明らかにされた。そしてその場合、藤田氏の分析視角がその方法的基礎となっていたことも既に述べた通りである。また庄司氏は、出雲・石見の鉄師の「資本」形成過程、経営規模、領主権力の鉄山業政策等を内容とする鉄山業の経営類型の比較分析を通して、そこに両地域の「地域社会の構造」の差異が次のような形で反映されていることを明らかにされたが、これも——分析視角ではなく——問題視角としては、寧ろ同じ系列に属するものである(即ち、「地域社会の構造」の差異が鉄山経営の中にどのように現われているかということの問題としたのであって、その逆ではない)。庄司氏は、社会構造の差異を、中世以来の武士出自の少数の大鉄師＝土豪地主的大土地所有者が、「親方との擬血縁関係」に基づく「株小作制」を基盤とし、「養米」(鉄山用飯米)を自給しつつ、藩の保護(租米の貸与・払下げ)・統制(専売制類似政策)のもとに大規模な鉄山業を営み、貨幣経済が一部の者(藩・鉄師)に握られている出雲と、僅少資産で小規模の鉄山業に着手する一方、商業・金融業・醸造業等により資本を加えた多数の小鉄師が存在し、領主の保護・統制も弱く貨幣経済の浸透がヨリ広範で、季節的の出稼労働がみられる石見、という対比において描き出している。他方、(2)庄司氏、岩永氏、宗森氏、松原氏等により、鉄山稼行に伴う稼行地帯村落への貨幣経済の浸透、鉄師の「資本」形成、農民層の分化、株小作制の形成、鉄師の結合経営の実態等のテーマが取り挙げられ、両者の関連が鉄山業→村落構造という視角から問題とされた。庄司氏と岩永

氏は、「貨幣経済」や「農民層分解」の「型」に関連して、鉄山業が貨幣獲得の機会を増し、人口を顕著に増加させた反面、特に凶作を契機とする(近世後期の)鉄師の土地集積、農民層の分化を通して創出されるのは、農奴主的地主と株小作的下人であり、且この後者を中心とする欠落農民が、鉄山関係の駄賃稼乃至山内労働者として鉄山業に吸収されていくことを指摘されている。松原氏も、鉄・砂鉄を産する石見・矢上村地方がその取引を介して広島経済圏とのつながりを強め、それは浜田藩札よりも安芸札が村内に広く流通するという形で現われてくること、文政年間に鑪主(=鉄師)が砂鉄値段・駄賃を引下げ、且下落した安芸札をその支払にあてたため、鉄穴流・駄送に従事する零細高持・小作層が騒擾を起すに至ることを指摘しつつ、「貨幣経済」にまき込まれた農村の姿を描いている。また宗森氏は、一鉄師のもとでの地主制と鉄山業との関連を分析された。そこでは、商業的農業(煙草)、醸造業、米穀取引、鉄荷問屋等の活動を通して天明期以降土地集積をすすめ、文化期以降着手する鉄山業の基盤を作ると同時に、この鉄山経営により更に保有地を拡大して村方地主として発展した一鉄師＝地主が、文政期には寄生地主制への志向を強めつつも、鉄山経営の不振と小作料未納等により確立しえないことが明らかにされた⁽¹¹⁹⁾。以上のように、鉄山業→村落構造という関連についても幾つかの個別研究が行われているが、第(2)節で述べたことと関連して、今後の研究が最も必要とされる領域である。⁽¹²⁰⁾ (経済学部助手)

〈追記〉 昨年9月「たたら研究会」に入会させていただき、金沢での47年度大会の折に、向井義郎氏を始め、多くの方から有益な話を伺うことができたことを、ここに記して感謝します。また、46年6月に逝去された武井博明氏の御冥福を祈ります。

注(116) 庄司久孝「たたら(鑪)の経営形態より見たる出雲・石見の地域性」、同「たたら歴史地理学的研究」。

(117) 庄司久孝「鑪より見たる近世中国山村の社会経済構造」93～99頁、岩永実「鑪製鉄の生産構造」282、285頁。なお、定本正芳氏も同様の事実を指摘されている。同氏「美作西北部の鉄山業と地域社会の変貌」(2)17～20頁。

(118) 松原高広「文政8年石見国矢上村における砂鉄取引騒擾」(たたら研究11号、1964)。

(119) 宗森英之「村方地主制と鉄山経営」。

(120) そのほか、庄司氏は、1)鉄穴流し、2)たたら稼行地の移動、3)製品の輸送などを通して、鉄山稼行が中国山地の開拓をすすめる要因となったこと、特に鉄穴流しに伴う下流の新田開発や砂鉄採取地跡の開拓が、株小作制の形成と密接な関連をもっていることを明らかにされた。庄司久孝「近世以降、たたら(鑪)による中国山地の開拓」(岡山大学法文学部学術紀要3号1954)。また森嘉兵衛氏は、近世末期の東北地方について、鉄山業(「商品生産的個人経営」)が稼行地帯＝「土地生産力低位な山村」(「自給自足の共同体経営」)に対して、「分解」的に作用し、そこに「名子抜、或いは零細な小作地を放棄して鉄山労働者に転向する者の増大」、「労働者の移動」を惹起したことを指摘している。森嘉兵衛「南部の鉄工業」278、280、283～284頁。